

村落祭祀空間および祭祀記録からの一考察

—今帰仁村謝名を事例に—

松 井 幸 一

1. はじめに

近年、沖縄の聖地空間がパワースポットとして注目されている。そもそも沖縄の聖地空間は祭祀をおこなう場所で祭祀空間ともいえる。琉球王国時代の祭祀は聞得大君を頂点とした階層的組織によって執りおこなわれるが、それ以前のグスク時代から琉球の社会は政治面を男性、祭祀面を同一血族の女性がつかさどる祭政一致の社会であった。

このような社会において祭祀は単なる祈りではなく生活に深く根付いており、これまでも地理学的な側面から村落の空間構造との関係についての研究がおこなわれてきた。特に沖縄県の北部は戦争の被害が比較的少なかったこともあり、かつての村落形態がよく残るとともに、現在も縮小したとはいえ祭祀が年中行事としておこなわれている村落が多い。そこで本研究では沖縄県北部の今帰仁村謝名において祭祀空間を現地調査し、祭祀空間の性格や祭祀記録がいかに空間構造の地理学的分析に活用できるかを提示する。

2. 謝名の聖地空間と祭祀

謝名には複数の聖地空間が存在する。まずは字誌をもとにそれらのうちのいくつかを確認したい。伝統的な村落には必ず御嶽と呼ばれる聖地空間が存在する。仲松は御嶽の神を祖霊神と定義し、「御嶽の神と村人とは、血のつながる親子関係になっている……¹⁾」という。謝名の住民が拝む御嶽はスムチナ御嶽である(図1)。スムチナ御嶽は謝名の他に玉城、平敷、仲宗根の住民も拝ん



図1 スムチナ御嶽での御願（じゃな誌より引用）

であり、4月におこなわれる祭祀は「四ヶの嶽の御願」と呼ばれる。一村一御嶽が原則である最も重要な聖地空間がなぜ4つの村で祭祀されるのか。仲松は村の分割や移動がおこなわれた際には、かつての祭祀空間を遙拝する事例を指摘している²⁾。またこの4村の祭祀は玉城ノロと呼ばれる玉城村の神女が管轄する。この同一の御嶽を拝む点と、同一の神女による祭祀を踏まえれば、この4村は古代村落であった時には一つの集団または何らかの繋がりを強く持つ集団であったことが推測される。

謝名には住民が謝名御嶽またはお宮と呼ぶ祭祀空間が小字「大島原」に存在する。この「大島原」は小字の中心部に小高い丘を有し、この丘に神社形式の鳥居と祭祀空間がある。元来、琉球の神社は首里・那覇を中心に一部にしか存在しないため、この鳥居は明らかに後世に造られたものである。沖縄各地には本来、御嶽やその他の聖地であったものが神社へと意味を変えられたものが少なくない。そのためこれらの判別には文献や聞き取りなどの調査による判別が欠かせない。そこで区長およびかつて神人と近い関係にあった古老への聞き取



図2 謝名御嶽の祠内部

りをおこなったが、謝名御嶽の由緒は不明であった。謝名御嶽の最頂部には祠があり、昭和9（1934）年に建立され、その中に2つの香炉と軍配、刀剣が置かれる（図2）。軍配については戦後に仕立てた記録が残っており古くはない。刀剣には鞘は無く、刀身がすでに錆びており年代を特定することはできなかった。香炉は北を向いているが、祠自体がコンクリート造りで新しく、遙拝方向を正確に反映しているかは不明である。

その他の重要な祭祀空間としてはアサギが挙げられる（図3）。アサギとは神アサギのことで首里王府編纂の『琉球国由来記』などには神アシアゲと表記されている。辞典では神アシアゲは「村の神を招いて祭りをおこなう小屋」とある³⁾。また多くの先学でも神アシアゲは建物を指すとしている。一方、仲松は神アシアゲと呼ばれる場所に建物が無い事例をいくつも調査した結果、先学とは異なる見解を示す。その見解を列举すると、（1）神アシアゲは殿と同じく祭祀場所の名称である。それは殿と本質的には同じものであって、たんに名称が異なっているだけである。（2）建物の有無とは関係がない。建物があっ



図3 謝名のアサギ

てもよいし、なくてもよい。(3)したがって名称も建物に由来したものではなく、沖縄方言の「アシアゲ」からつけられたものと考え⁴⁾。つまり、仲松は神アシアゲとは祭祀をおこなう空間と定義した。

謝名のアサギは謝名御嶽と同様に小字「大島原」に存在し、かつては茅葺きであったが現在は建て替えられ、コンクリート造りとなっている。

アサギの香炉は謝名御嶽の祠と同様に村落の北側に向く。現在、謝名では1月の初御願から12月のフトチ御願まで計14回の年中行事がおこなわれるが、このうち9回はアサギでの拝みが含まれ、アサギでの祭祀がいかに年中行事の中で重要かを物語る。

ここまでスムチナ御嶽と謝名御嶽、アサギと3つの村落祭祀の重要空間を確認した。まず考えたいのは謝名では一村一御嶽であるはずの村落で、なぜスムチナ御嶽と謝名御嶽の二つの御嶽で祭祀がおこなわれるのかという点である。仲松は御嶽の種類の中には「通し御嶽」があることを指摘する⁵⁾。「通し御嶽」は「遙拝御嶽」であり、移動した村落か、分村した村落に多く、または距離的・

地形的関係上交通的制約のために、御嶽に自由に行けない村落の場合に新たに御嶽をつくってそこで祭祀がおこなわれる。ただこの「通し御嶽」は遙拝を目的とするため、香炉の向きはかつての御嶽のある方向を向く。この点を踏まえれば謝名御嶽がスムチナ御嶽の「通し御嶽」とするならば後背の南側を向くべきである。同様にスムチナ御嶽神を招請するならばアサギの香炉もまた南を向くべきであるが、両者の香炉はともに北を向く。この点について聞き取り調査をおこなったが、すでに半世紀以上前に祭祀をおこなう神人が祭祀の縮小や継承者不足から失われており、本来の向きや意味を確認することはできなかった。

次に本研究では『琉球国由来記』記載の「各処祭祀」から琉球王国時代の御嶽の存在および性格の確認をおこなった。『琉球国由来記』は琉球王国による地誌資料で1713年に完成している。本書には各間切⁶⁾の祭祀空間およびそこの祭祀の一部が記載される。そのためこの資料を用いることによって当時の認識されていた祭祀空間とその性格を明らかにすることができる。

『琉球国由来記』記載の謝名村には祭祀空間として「神アシアゲ」のみが挙げられる。これは先に挙げた謝名のアサギを指し、1700年代の時点ですでにアサギが存在していたことを示す。またその祭祀は玉城ノロがつかさどるとあり、スムチナ御嶽での「四ヶの嶽の御願」と同様に他の3つの村との強い繋がりがみられる。ここで興味深いのは謝名を含む4つの村が拝むスムチナ御嶽の神名である。仲松は『琉球国由来記』記載の御嶽の神名について、神の機能、美称・御嶽内の地相、イベを示す植物岩石を神名としたのだと推測している⁷⁾。スムチナ御嶽は神名を「コシアテモリノ御イベ」とする。琉球には祖霊崇拜とも繋がる「腰当思想」と呼ばれる土着思想が存在し、それは村そのものや家屋配置に大きな影響を与えてきた。つまり「コシアテモリノ御イベ」の「コシアテ」とは「腰当て」を指し、機能をもとにした神名であると考えられる。「腰当思想」は上位・下位の観念を持ち、最背部に御嶽としての「腰当森」が存在し、その前面に村の宗家、さらに前面に分家、新規移住者の家屋が分布する。つまりスムチナ御嶽は明らかに「腰当思想」の基盤となる「腰当森」となりう

る御嶽である事が神名から確認できた。

3. 謝名の祭祀資料

現在、謝名の祭祀は区長を中心とした有志によっておこなわれる。かつては複数の神人が存在して祭祀をおこなっていたようだが、神人の継承もなく、また住民の祭祀に対する意識の変化もあり、その継続自体が困難となっている。80歳後半になる男性の古老によれば、子どもの時には神人の関係者が家の近くに住んでおり、その方から祭祀に関することを聞くこともできたが、現在は後継者もおらず、最も祭祀に詳しいのはこの男性になった。そのため本来は女性が祭祀をつかさどるが、現在は祭祀および祭祀空間などの各種相談はこの方に聞くことが多いという。

琉球の伝統的な祭祀での祝詞は口伝によって継承されてきた。しかし多くの村では神人の継承ができずに、祝詞そのものが失われた。現在、謝名の祭祀では区長が祝詞をあげるが、その内容は本島南部の祝詞を真似たものであるという。そのため祝詞自体からかつての祭祀の内容を復原するのは難しい。その一方でかつての神人の家には「あらたもと」の際の諸費の記録が残っている⁸⁾。本論文ではその一部を字誌から引用しつつ神人の交代において重要視された祭祀空間を俯瞰する。「あらたもと」とは新しい神人が誕生した際の神人の引き継ぎの行事である。謝名の古いものでは大正6（1917）年のものから昭和15（1940）年のもの、さらに昭和31（1956）年の記録などが残る。

大正6年の記録を確認していくと、まず八月八日に玉城ノロ殿内と内神殿内に供え物をおこなっている（図4）。玉城ノロ殿内はもちろん隣村の玉城村にあり、内神殿内も玉城村にあることから、謝名の神人が玉城ノロと強い関係にあることがうかがえる。続いて八月十日には村内のアサギにて七寸重箱や美花米（白米）などを備えている。またこの際に諸費を入用したのは538人で、その中には仲宗根や崎山など他村の住民も含まれており、一門に繋がりのあるものと考えられている。

村落祭祀空間および祭祀記録からの一考察
—今帰仁村謝名を事例に— (松井)

大正六年旧八月一日あらたもと

謝名大主前

緒費 取立 帳

八月八日玉城のろ殿内井二

内神殿内式ヶ所御引合御

タカビノ時御五水壺ヶ所二

式合五勺宛

一 焼酎五合

代拾貫文

右全美米白米壺ヶ所二

壺升八合宛三升六合

一 全四升五合代

代四拾九貫五百文

右全七寸重式次拝調二入

一 全四升

代四拾四貫文

一 全壺戸四升

代百五拾四貫文

八月十日謝名あしやげ二於

新たもとの時小飯井二七寸重

全壺戸四升八合

一 全式升二合五勺

代式拾四貫七百五文

全御五水代

一 全壺升代

代式拾圓文

神拝相済親類中

新たもと祝儀二入

一 焼酎壺升五合代

代三拾貫文

八月朔日諸入費取立割

府ノ時相談用二入

一 全壺升五合代

代三拾貫文

メ三百六拾式貫式百五文



図4 内神殿内の祠

昭和15年の記録では、大正時と同様にまず玉城ノ口殿内と内神殿内に供え物をおこない、続いて村内のアサギに七寸重箱と美花米などを供える。諸費を入用したものは若干増加し、544人となっている。

昭和31年の記録でも基本的な進行に変更はない。まず八月八日に玉城ノ口殿内へ酒5合、花前一升、もち米一升5合、御香を供える。ただし大正6年と昭和15年時には玉城ノ口殿内と同時に内神殿内へも供えものをするが、昭和31年時には内神殿内の記載がなく単に「字内・マチ内」とあるのみである。単純に字内といえは謝名を指すと考えられ、内神殿内とは別とも捉えられるが、この点は古老に聞いても不明であった。続いて八月十日には御重用のもち米の支出が見られることから、御重を供えていたと考えられる。

昭和拾五年旧八月一日
故親川ウ戸身変根神入費取立簿

誌

八月一日玉城のん殿内並二内神 殿内式方所御加たびの際御酒 一所二付式合五勺ヅ 一 酒五合	八月拾日謝名アサギニ於て新だ元 の時鉢盛立二七寸重式次 金 壹円美花米代 金 貳円拾銭餅米代 餅米四斤
同日美花米壹ヶ所二付九合 〇〇〇 一升八合	八月一日新元取立究用 代壹円也 同日ウサギ村ち酒五合 一 酒五合
同日七寸重式次餅三升 八合	一 金壹円 今日神御願濟門中親類中 新だ元祝儀ノ際 酒五合
同日計酒五合 美花一升八合 〇〇〇〇	一 金壹円 計一 金七円九拾銭 雑品入費
一 金壹円酒五合	総計
一 金壹円酒五合	金拾貳円也
一 金壹円美花米三升	
一 金貳円四拾銭	
計 金四円拾銭	

村落祭祀空間および祭祀記録からの一考察
—今帰仁村謝名を事例に— (松井)

一九五六年旧八月十
新田元取立

旧七月二三日取立打合

旧八月八日玉城ノ口穀内へ

酒 五合 五拾圓也

花前 一升 三拾八圓也

モチ米 一升五合 六拾圓也

(重箱用)

御香 拾圓也

旧八月八日宇内マチ内

花前 五合 拾八圓也

酒 三合 參拾圓也

御香 拾圓也

旧八月十日謝名アサギニ於て

御重用モチ米 三升 一二〇圓

(〇デデ分)

アラダモト明モチ米八升 三〇八圓也

酒 一升五合 一三五圓也

花前 二升 七六圓也

打合の雑費 三〇圓也

衣 一〇〇圓也

総計 九八三圓也

費用出資者

門中 一戸当り二〇圓の三〇戸分

字民 一戸当り五円の七〇戸分

取立以後島袋昌子は

神立しで有り上記の取立は

一人の見積なり

4. 祭祀資料の可能性

この「あらたもと」の記録からは、神人の交代の際には玉城ノ口殿内と内神殿内、謝名のアサギが重要な空間として認識されていた事が確認できる。玉城ノ口殿内へのお供えは、謝名村の祭祀をつかさどる玉城ノ口への供物であろう。興味深いのは玉城村の内神殿内への供物である。内神は神人の一人で、謝名の桃原と玉城の平良の両一門の中から一人だけ選ばれその役に就く。4村を巡る祭祀ではノロとともに行動するほか、ウプユミの祭祀ではまずノロがアサギを拝み、内神殿内をノロと内神が拝むところから祭祀は始まる。各種祭祀で

もノロの隣席に着座する事例がみられることから、他の神人に比べても高位の神人であると推測される⁹⁾。現在、このような神人の継承は謝名村では途絶え、玉城村区長への聞き取りでは玉城村でも祭祀は一部の有志によっておこなわれ、かつての神人とは関係がないという。しかし「あらたもと」の記録からは謝名村と玉城村の互いに入り組んだ祭祀形態がうかがえる。

また供物に関しては七寸重箱や美花米、御五水の供えが基本であったことが確認できる。先行研究では『琉球国由来記』の酒に関する分析から、各地域で供えられる酒が異なり、また祭祀や供え物をする者の地位によってそれらは変化することが指摘される¹⁰⁾。現に『琉球国由来記』記載の謝名村神アサギの祭祀の項でも、五水、蕃薯神酒、芋神酒と区別され記載される。謝名村においても『琉球国由来記』と「あらたもと」の記録を照らし合わせながら、祭祀、備える者、その地位を詳細にみれば酒と祭祀の関係はより深く分析できるだろう。

5. 終わりに

本論では謝名村の祭祀空間と一部の祭祀記録を取り上げ、それらがいかに地理学的分析に活用できるかを検討した。祭祀空間の性格からは謝名村が2つの御嶽を有することから、分割または移動村落であることが推測された。さらにスムチナ御嶽の神名からは、この御嶽が「腰当思想」の基盤となる腰当であることが明らかとなった。

祭祀資料の分析からはノロ殿内と内神殿内が重要視され、内神は謝名村と玉城村の特定の一門から一名が選ばれることから、両村の結びつきは御嶽や祭祀経路のみでなく、神人においても存在することを確認することができた。

本論は祭祀空間と祭祀記録の一部提示に留まっており、謝名における祭祀空間の実態の解明には不十分な点は否めない。しかし各種の祭祀空間の性格や祭祀記録の分析が地理学的な村の空間構造解明の一助になることは示せたと考える。今後はさらなる祭祀の分析を進めるとともに、琉球王国時代の村落の景観復原を進め、両者を統合する形での分析をおこないたい。

村落祭祀空間および祭祀記録からの一考察
—今帰仁村謝名を事例に— (松井)

謝 辞

本研究にあたり、謝名公民館区長の玉城政隆氏、元区長の玉城光盛氏には資料の提供および聞き取りで大変お世話になりました。また祭祀の聞き取りでは多くの住民にご対応いただき心から感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 JP21K01037 の助成を受けたものです。

注

- 1) 仲松弥秀『神と村』琉球大学沖縄文化研究所, 1968, 19-23頁。
- 2) 仲松弥秀『古層の村』沖縄タイムス社, 1977, 171-172頁。
- 3) 琉球新報社編『沖縄コンパクト辞典』琉球新報社, 2003, 122頁。
- 4) 前掲1) 145-154頁。
- 5) 前掲1) 88-94頁。
- 6) 間切とは琉球王国時代の行政区分を指す。
- 7) 前掲1) 76-78頁。
- 8) じゃな誌編集委員会『じゃな誌』1987年。
- 9) 普天間高等学校郷土研究クラブ「玉城の民俗調査報告」(玉城字誌編集委員会編『玉城字誌』2018年, 297-322頁)。
- 10) 萩尾俊章「沖縄における神酒と泡盛の諸相」沖縄県立博物館紀要第18号, 1992年, 1-18頁。